天動説

天動説

　どうもヤツが気に食わなかった。そのヤツ、というのは、俺と対立している宗教団体のリーダーだった。ヤツは自分を唯一神とし、弟子をなんともいいように使うのだ。なんか、テロを食い止めた、とかいう架空の実績を言い触らすし、挙げ句の果てには世界は私を中心に回っている、だなんて抜かしやがって。馬鹿め、地球は地軸を中心に回ってんだ。
　で、どうにも癪にさわるんで、今私は藁人形を編んでいる。ここは我らが本部の大広間。そこに数名の幹部を呼んで、今こうしている。この部屋は結構明るい。ヤツの団体の本部とは大違いだ。と、そうこうしている内に藁人形が出来上がった。明るかったので作業がしやすかったせいもあるが、まず部下達が読経してくれていたのがいちばんこたえた。さて。私は両手を上げ、部下を静まらせた。そして一人の部下にヤツの髪の毛を持ってこさせた。これはある極秘ルートを辿ってやってきた貴重なものだ。まあいい。私はヤツの髪の毛を人形の中に差し込み、呪文を唱えた。やがて人形は神々しい光を輝かせはじめた。呪文が唱え終わった時には人形はもう、この部屋の照明を優に越える明るさを放っていた。輝いているのがヤツの化身だと思うと、ハラワタが煮え繰り返るほどいらいらした。そして私は人形を掴むと、それを思いっきり投げ飛ばした——。
　すると私たちは人形を投げ出した方向へと、まるで何かに引っ張られるかのようにつんのめった。前方へと倒れこんだ私は、なにがどうであれ一先ず人形を回収しようと立ち上がったがその時はもう手遅れだった。人形は換気扇へと吸い込まれていき、直後に我々は猛烈な遠心力に襲われた。

満月の夜の小話

　彼の妻はとうに失踪していた。買い物に出かけたきり帰って来なかった。仕方もない。男の酒癖は尋常じゃなかったのだ。その日の晩は野良犬の遠吠えがやけに大きく聞こえたものだった。だが以来は改心し、ちゃんとハローワークにも通っている。
　その日も彼は職業安定所から帰ってきた。しかし、その日の彼の顔は喜びに満ちていた。ようやく仕事を見つけることができたのだ。しばらくのあいだぼんやりと宙を見つめていた男だったが、やがておもむろに起き上がり、台所へと向かった。そして何気ない風に酒へと手をのばしたが、すぐにそれを引っ込めた。今また悪循環にはまっていては、今までの苦労が水の泡だ。気を紛らわそうと、男は帰りがけにコンビニで久しぶりに買ってきた新聞を読みはじめた。とはいうものの、彼は新聞の酒の広告に張り付いていたが。
　やっとのことで記事を読みはじめることができた男だったが、ふとある記事に目をとめた。ある男性とその妻の話だった。男性はパチンコの癖が悪く、妻にも暴力を振るっていた。そんな彼に愛想を尽かした妻は、ある日忽然と男性の前から姿を消してしまった。反省した男性は、仕事を見つけるべく方々を走り回り、ようやく仕事を手に入れたのだった。そんなある日、男性が住んでいるアパートの庭をふと見ると、そこにいた野良犬がある一点を一生懸命に掘っていた。興味を持った男性は庭に下り、犬が掘るのを手伝っていると、中から紙の入った小さな瓶が出てきた。それは彼の妻からの手紙だった。彼女が家出をする前に埋めたのだろう。男性の妻は、廃人となったあとでさえもその夫に期待していたということだ。一匹の犬が再び二人を結び付けた。ふうん、と頷くと、集中力が切れたのか、男は新聞を放って外へ散歩をしに向かった。
　部屋を出てアパートの階段を下りていると、そのふもとで犬が何やら掘っていた。男はふと立ち止まり、それを見た。だがまたすぐに、今度は以前よりも軽い足取りで歩きはじめた。いまさら妻のことを思っていたって、もう遅いではないか。それよりかは、新しい自分に目を向けよう。鼻歌まじりに男はその場を希望に満ちた目つきで去っていった。ふと野良犬があの時と似たような遠吠えをした。いつだったか、アパートの階段下に埋めておいた獲物をやっと見つけたのだ。買い物袋を握った女性を。

二〇十三年四月二十五日

詩人たちのやり取り

　　詩人達のやり取り

あの日
みんな銃声で目が覚めた
だから今日もみんなの目覚まし時計から
銃声が流れる

これを聴いて、私は得意になった。そして返信した。

今日も
みんな希望に溢れてる
明日という日も楽しみだから
みんなは希望で目覚める

相手がふふふと笑った。直後に相手側から響いた銃声は聞き慣れていた。

また今日もダメだったか。私は次の話し相手を探す。
遠い星から。

天動説

http://p.booklog.jp/book/72827

著者：重長真
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/72827

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/72827

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ